

## 8 カスパル流外科について

### ヴォルフガング・ミヒエル

カスパル・シャムベルゲルが二度江戸において、患者の治療に当たり、大目付井上政重の興味を引いたことは周知のことになっている。しかし、彼の外科医としての活動の様子を明らかにするためには出島商館の日記以外の文献を探さなければならぬ。一六五〇年二月十日に稲葉美濃守の腕を治療したことについては、宗田一氏が紹介した『阿蘭陀外科医方秘伝』に詳細な処方が残っている。

私はさらに、シャムベルゲルがバイレフェルト、スヘーデル、スミトと共に江戸に残っていた一六五〇年五月十六日から十月十五日にかけての資料としてバイレフェルトと出島商館の間で交された書簡と並びにバイレフェルトによる毎日の出納簿を発見した。どの薬品をオラン

ダ人がその年江戸に運んだのか、特使ブロックホーヴィウスとフリシウスが乗っていた船の送り状から知ることができる。そこには薬箱二個分の中身がリストアップされており、それらは『阿蘭陀外科医方秘伝』及び『阿蘭陀外療集』に記されている一連の薬品とおおよそ一致している。さらにまた、一六五〇年と一六五一年に井上筑後守が行った注文も、バタヴィアで交付された送り状などから復元できる。

シャムベルゲルの教えが元来どういふものであったか把握するのは容易ではない。江戸滞在中の通詞猪股伝兵衛などによる記録はそれ以降のものと混ざってしまったため、「カスパル」の名称で様々な文献が残ってきている。特に注目すべきものはまず河口良庵に遡る『阿蘭陀外療集』と、著者不明の『阿蘭陀外科医方秘伝』である。その中に記されている日付は西暦の一六五〇年の十月と十一月で、シャムベルゲルの江戸滞在が終わる頃にあたる。宗田氏はここに見られる十七の軟膏薬がおそらく直接シャムベルゲルによるものであると、かねてから指摘されてこられた。この時期の第三の文献は京都大学に保管さ

れている『紅毛外科書』であり、一般に西流外科に属すると推定されている。ここにも日付(二六五一年十一月)及び猪股伝兵衛の名が見られる。おそらくシヤムベルゲルが同年十一月一日にバタヴィアへ旅立つた直後、猪股がシヤムベルゲル日本滞在の二年間に集められていた記述を再考したものであろう。この『紅毛外科書』にも上記の十七方が記されている。

シヤムベルゲルの軟膏薬の処方の出典はこれまで不明であった。ヨーロッパの薬事書と比較することにより、その大半は一六三六年のアムステルダム薬局方によるものであることが明らかになった。しかしこの薬局方はアウグスブルクやロンドン、ケルンの薬局方に遡るものであり、シヤムベルゲルが紹介した膏薬の中には中世のイسلام系学者によるものもあるので、カスバル流外科のこの十七方についてはオランダやドイツ流のものだと断定することはできない。

上記の三つの文献を比較すると他にも共通した部分があり、シヤムベルゲルの「教え」の原形が浮かび上がってくる：(a)寒熱風痰見様之事、(b)寒熱風痰療治之

事、(c)膏薬能毒之事、(d)膏薬煉様、(e)種々の腫物や傷の手当、(f)幾つかの油薬の紹介。さらに、四十以上のカスバル流の古文書を比較すると、上記の項目が驚くほど広まっていたことやその伝達の流れの一部が明らかになる。

十七世紀のヨーロッパの大学に於ける医学研究と比べると、特にシヤムベルゲルの病理学は時代遅れのように思えるが、彼の出生地ライプツィヒの外科医ギルデの試験規定や東インド会社の外科医採用のために書かれた「外科学の試問」が示すように、当時の外科医には様々な実践的な技能が要求されながら、「理論」の養成は極めて単純な体液論に留まっていたことを考え合わせるとそれも当然のことであつたらう。

(九州大学言語文化部)